

プロローグ 4

第一章

天井のない監獄 11

第二章

とつじよ始まった激しい戦い 31

第三章

極限状態の避難生活 51

第四章

医師が残したメッセージ 67

第五章

ガザ地区ハンユニス、ナセル病院 89

第六章

避難民であふれる街・ラファ 125

第七章

「徹底的な破壊」のあとに 145

エピローグ 190

【最後まで残った人は、何があったかを伝えてください。

私たちは自分にできることをしました。

私たちが忘れないで】

激しい戦闘が続く地域で、攻撃を受けた病院のホワイトボードに残されていた言葉。亡くなった医師が書いた、それは、息を潜めてなりゆきを見守る世界に、大きな課題を投げかけた。

中東パレスチナ・ガザ地区――。

複雑な歴史に振り回されてきた場所である。

隣接するイスラエルと、長い間、緊張した関係が続いてきた。力の差がある中で、人々の暮らしはたびたび危険にさらされ、数年に一度は大きな衝突が起きて、ケガ人や死

者が出ることもあった。

それでも、そこにはまだ人々の日常があった。

ところが……。あの日を境に状況が一変した。

2023年10月7日。

ガザ地区を実効支配するイスラム組織ハマスの戦闘員が、とつじよ、イスラエルに対して大規模な奇襲攻撃を行い、イスラエルは激しい空爆と地上戦で報復した。

「ハマスを絶滅させるため」とイスラエルは主張する。

しかし、戦闘によって命を落としているのは、ハマスとは何の関係もない一般市民だ。

学校、難民キャンプ、そして、病院……。

攻撃を受けてはならないはずの場所までが標的にされている。「ハマスの隠れ家になっている」というのが、イスラエル側の言い分だ。

未来を担う子どもたちが通う学校が攻撃されれば、命が助かってても、子どもたちは学ぶ場を失い、成長の機会を奪われることになる。

学校は避難所として使われることが多く、戦時下では、生徒・児童に限らず、一般の人たちもたくさん身を寄せる。そんな場所が攻撃されたら、いったいどれだけの犠牲者が出てしまうのか……。

難民キャンプも同じである。

住む場所を奪われて故郷を追われ、やっとのことでそこに落ち着いた人々が暮らす場所。そこが攻撃されれば、人々は、命からがら逃げ出したとしても、また、どこか別のところに居場所を求めてさまよわなくてはならなくなる……。

病院もまた、人が大勢集まる場所だ。

攻撃によって、その人たちの命が直接的に危うくなるのはもちろんだが、病院への攻撃は、間接的に人の命を奪うことにもなる。病院が機能しなくなれば、病人やケガ人は治療を受けられない。つまり、本来なら助かる命も助からなくなってしまうということだ。

その病院が次々と攻撃されている。

死を覚悟し、それでも患者を見捨てなかった医師たち。冒頭のメッセージは、攻撃

で亡くなった医師のひとりだが、死の1か月前に病院のホワイトボードに残したものだ。

今、ガザでは何が起きているのか。

人の出入りが厳しく制限されるガザで、戦闘開始以降も滞在していた、ごくわずかな外国人の中に、十数人の日本人がいる。民間の医療・人道援助団体『国境なき医師団 (Medecins Sans Frontières = 略称MSF)』に所属し、現地で医療支援に従事していた人々だ。

彼らの証言を通して、想像してみてほしい。ガザで何が起きているのかを。

今、ガザでは、何の罪もない人々が次々と命を落としている。

命が助かった人も、大きなケガを負わされて、苦痛と苦悩の中に置かれている。爆撃で住む家を破壊されて、途方に暮れている。

大切な家族や友人や恋人を奪われて、悲しみに沈んでいる。

食料不足で飢餓と闘うしかなくて、絶望の淵に立たされている。